

厚岸シンポジウム

身近な海の世界

- 厚岸の海洋生態系について考える - 報告書

厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金

受領者 庄子晶子

開催趣旨

厚岸町の大黒島とその周辺海域に生息する多様な生物と海洋生物が直面している環境問題について紹介し、関係者や地域住民との交流を図るために、**2020年1月12日（日曜日）14時～17時**に、本の森厚岸情報館にてシンポジウム「身近な海の世界 - 厚岸の海洋生態系について考える -」を開催いたしました。

プランクトン、魚とカキ、海獣（アザラシ）、海鳥、そして海洋ゴミ問題（海洋プラスチック）に関わる**5名**の演者を招き、最新の研究結果が報告されました。

本シンポジウムは、大黒自然研究会主催、厚岸町・厚岸町環境教育水産員会共催により、また、開催にあたっては、前田一步園財団助成金、厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金、および北海道新聞野生生物基金の助成を受けました。

関係機関の皆様には、ここに深く御礼申し上げます。

大黒自然研究会

シンポジウム 身近な海の世界

-厚岸の海洋生態系について考える-

2020年1月12日(日)

14-17時

厚岸町 本の森情報館
視聴覚室

開催目的：厚岸町の大黒島と、その周辺海域に生息する多様な生物と海洋生物が直面している環境問題について紹介し、関係者や地域住民との交流を図る

司会・進行 庄子 晶子 (大黒自然研究会)

1. 14:00-14:05 趣旨説明
西沢 文吾 (大黒自然研究会)
2. 14:00-14:35 親潮域の植物プランクトンと鉄の関係-森は海の恋人？
伊佐田 智規 (北海道大学 厚岸臨海実験所)
3. 14:35-15:05 厚岸の海で魚を追いかける～ニシンとマガキの研究～
富安 信 (北海道大学 水産科学研究院)
4. 15:05-15:35 厚岸湾周辺のゼニガタアザラシ
小林 由美 (大黒自然研究会)

休憩 15:35-15:45

5. 15:45-16:15 世界有数の海鳥繁殖地である大黒島の「今」を知る
大門 純平 (大黒自然研究会)
6. 16:15-16:45 海洋プラスチックが海鳥に与える影響
田中 厚資 (北海道大学 獣医学研究院・日本学術振興会)
7. 16:45-17:00 総合討論

主催：大黒自然研究会 (<http://daikoku.mystrikingly.com/>)

共催：厚岸町・環境教育推進委員会

助成：前田一步園財団・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金・北海道新聞野生生物基金

広報厚岸 1月号と掲載記事



厚岸の海洋生態系に ついて考える

水鳥観察館では、大黒自然研究所
主催、厚岸町・厚岸町環境教育推進
委員会共催による、厚岸町の大黒島
周辺海域に生息する多様な生物と、
海洋環境問題についてのシンポジウ
ムを開催します。

5人の専門家を招いて、プランク
トン、魚とカキ、海鳥、アザラシ、プ
ラスチック汚染に関して、最新の研
究成果を紹介します。

●日時／1月12日(日)、14時から17時

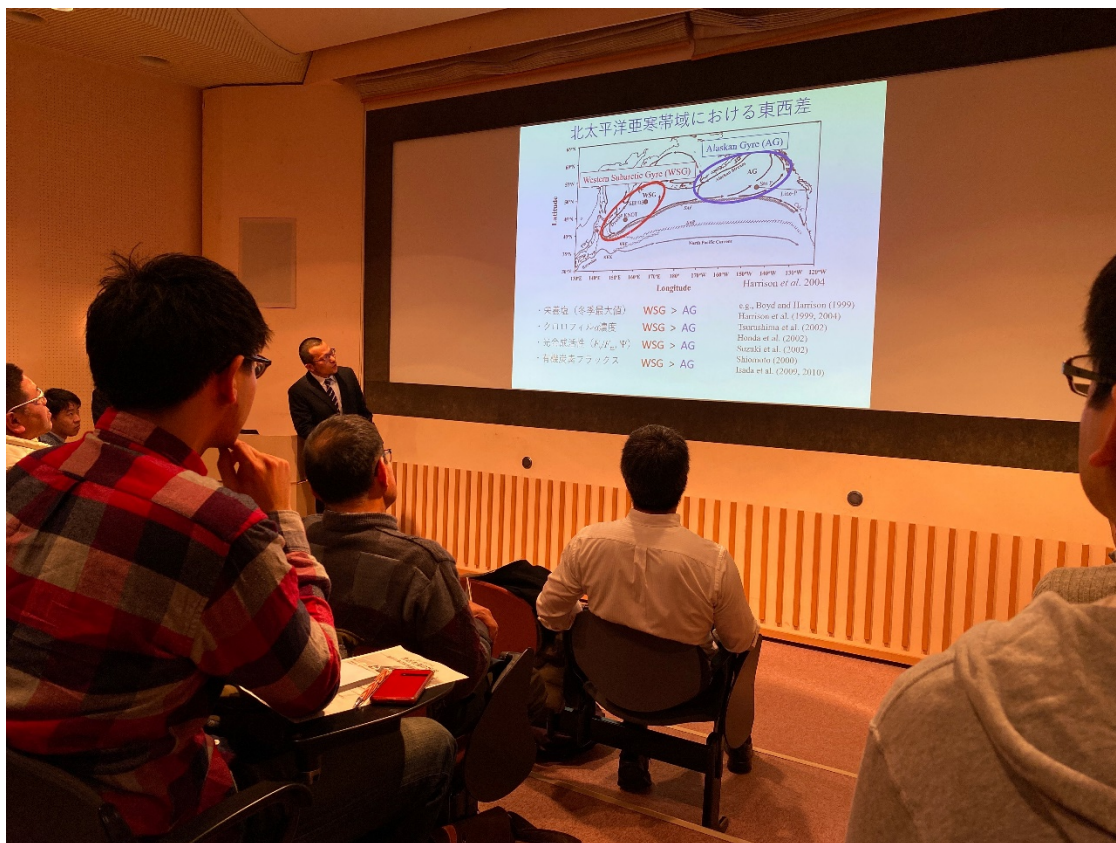
●場所／情報館2階視聴覚堂

●申し込み／不要(先着50人)

水鳥観察館

問い合わせ
水鳥観察館 52-5988

当日の様子





質疑応答

出席者から：鉄の多い場所については、アムール川からの供給があるということがわかったが、では、鉄が少ない場所については、何か理由があるのだろうか。地球のプレート移動なども関係しているのだろうか？

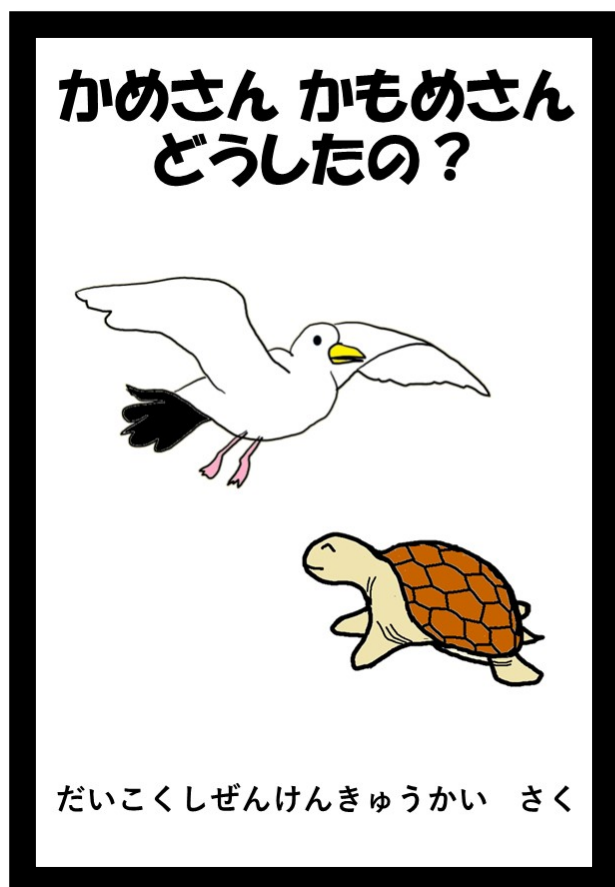
伊佐田：鉄が少ない場所というのは、陸からが遠い、というのが一番の理由であると考えられている。陸から遠い海域では、陸からの鉄の供給がないので植物プランクトンが少なく、鉄がなかなか増えていかない、ということである。地球のプレートの影響などについては、まだわかっていないことが多い。

出席者から：大黒島では、ドブネズミの侵入はあるのか？

大門：いまのところ、我々が調査している範囲内では、ドブネズミの侵入は確認されていない。よって、海鳥の種によっては生息数が激減しているのは、ドブネズミ以外の要因と考えている。原因については、発表でも申し上げたように、今後も調査をしていくことで、追及していきたいと考えている。

絵本の配布について

大黒自然研究会では、2019年8月22日に、環境絵本「かめさん、かもめさん、どうしたの？」を出版した。本シンポジウムで在庫について告知し、希望者には会場で配布した。非常に好評であった。



海鳥の繁殖数
大黒島で激減

自然研究会シンポジウム

【厚岸】大黒島の海鳥やアザラシなどの研究者団体「大黒自然研究会」（代表・西沢文吾国立極地研究所研究員）は12日、厚岸沿岸の海洋生態系について考えるシンポジウムを開催した。

大黒島と周辺の生物について幅広く報告が行われたシンポジウム

シンポジウムを厚岸情報館で開いた。海鳥の繁殖地である大黒島の重要性やニシンの回遊などに関する研究成果が発表された。

北大水産科学院博士後期課程の大門純平さんは、大黒島は日本有数の海鳥繁殖地であると強調。だが、かつて8千〜1万組確認されたオオセグロカモメのつがい近年約30組に激減するなど、島で繁殖する鳥がこの40年間で大きく変化したことを報告した。ウトウがひなに与える主な餌が2017年まではサケ稚魚だったが、18年から大ぶりのマイワシになったことも説明。「ウトウはその地域の魚の変動を表す指標」と、海鳥研究の意義を語った。

また、厚岸湾や厚岸湖内でのニシン回遊の研究発表もあり、資源管理のためには回遊や産卵の時期を考慮して漁獲量や漁期、保護区の設定、産卵用の人工海藻開発の必要性が提案された。アザラシの生態や海洋プラスチックの危険性、道東の豊富な植物プランクトンなどに関する報告も行われた。（村岡健二）

ながら良い結果に向けた取り組みを進める。